

7月号は、p.1『はじまりの日』、p.2,3『学園祭を終えて』、p.4『2025 学園祭 Tanabata Wish for Tohoku』、p.5,6『3年生のくらしとしごとの活動より』、p.7『ヨハネ祭』、p.8『学期祭』のトピックでお届けします。

## はじまりの日

6年生担任 長井 麻美

2005年4月に横浜シュタイナー学園が開校して早20年が経ちました。前年度中に保護者、教員、スタッフ有志の呼びかけにより、2025年度は「開校20周年イヤー」として、年間を通してお祝いすることが決まりました。様々なアイデアが生まれ、次々に目に見えるような形になっています。

そのような中、20周年プロジェクトのメンバーから「開校記念日を制定したい」という声が上がったそうです。ほどなく「学校の誕生日はいつですか？」という質問が教員会に届けられました。

第一期生の入学式は2005年4月10日でした。新年度始まって早々というもなんだか……。霧が丘校舎の改修工事完成のお披露目は3月27日……。春休みにお祝いするのもちょっとね……。学園がNPO法人に認定された日は？12月だったような……。覚えていません、すみません。

強く印象に残っている一つの出来事があったことに気づきました。2004年に入り、校舎物件を探してきた皆が焦り始めた頃のことです。よさそうな物件が緑区の霧が丘にあるという情報を聞いた創立メンバーは、直ちにその建物に足を運びました。広い道路に面した三階建ての小ぶりなビル。進学塾として使われていたという建物には、教室があり、オイリュトミーが出来る広めの部屋もありました。これまで見てきたどの物件でも描けなかった「未来」を描くことが出来る建物。しかもすぐ近くには緑がいっぱいの公園がありました。この物件を何とかして手に入れよう！とすぐに動き始めた結果、春には無事に賃貸契約にたどり着いたのです。その契約締結の日が忘れもしない、2004年5月27日でした。

契約に立ち会った神田昌実先生から、手続き完了の派手な報告メールが全メンバーに届き、皆からは嵐のような「おめでとう！」の返信が続きました……。わたしが、「この日を学園開校の記念日にしては？」と問いかけると、神田先生も賛成してくれました。かくして、5月27日は、「はじまりの日」と名付けられました。

2025年5月27日に、この日を全校で心を一つにして祝えるようなことをしたい。という願いから、教員演じる寸劇に、1年生から9年生までの子どもたちが「音や声」で参加するという試みを行いました。

当日はぶっつけ本番ではありませんでしたが、子どもたちの協力の甲斐があって、あたたかな楽しいひと時を十日市場校舎のオイリュトミー室で過ごすことが出来ました。以下がその台本（らしきもの）です。情景を思い浮かべながらお読みいた

だけたら幸いです。来年はまた別の形で祝えるとよいなと思っています。



～全校協力劇「はじまりの日」～

(ナレーター:以下、ナ) 昔々、横浜の鴨居というところに、子どもたちを土曜日に集めて教えている先生たちがいました。ある日、そこへ別の土曜学校の先生が訪ねてきて言いました。

(1、2年生・・・トントントンと床を叩く)

(ある土曜クラスの先生)「この横浜に、子どもたちが毎日通えるシュタイナー学校を作りましょう！」

(3、4年生・・・パチパチパチパチと拍手する)

(ナ) その頃、幼稚園児を持つお父さんお母さんや、土曜学校に大きな子どもを通わせていたお父さんお母さんたちも集まって、相談していました。

(あるお父さん)「うちの子どもをシュタイナー学校で学ばせたい！」

(5、6年生・・・そうしよう、そうしよう！1回目 5年生  
→2回目 5、6年生)

(ある大きな子どもを持つお母さん)「わたしはこれから育つ子どもたちのために、シュタイナー学校を作りたい！」

(7、8年生・・・「賛成！」)

(ナ) このあと、先生と保護者たちは一緒に協力して、学校作りの準備を始めました。

まずは、建物探しです。たくさんの遠足がありました。

(9年生・・・ブブーなど、自由な効果音)

(ナ) そして、とうとう、霧が丘校舎の建物と出会いました。それが、学校が始まる前の年の5月27日でした！

(3、4年生・・・パチパチパチ・・・拍手)

(ナ) みんな嬉しくて、嬉しくて、お互いに何度もこう言いました。

(全員ウェーブで次々に「おめでとう！」)

(ナ) それから、この建物を子どもたちが通う学校らしくするための工事が始まりました。

先生たちやお父さんお母さんたちがお休みの日に集まりました。それに大勢の友達も手伝いに来てくれました。

(9年生・・・工事の効果音)

(ナ) ある人は、壁紙を張り、ある人は壁紙に色を塗り、ま

たある人は、電球を取り付ける板を削り、ある人は、床板にワックスを塗りました。

こうして、一年たった4月10日。横浜シュタイナー学園の校舎で初めての入学式が行われました。

(全員で拍手)

(教員全員) これが、横浜シュタイナー学園の始まりです。

## 学園祭を終えて

9年生担任 伊藤 雅子

『学園祭』それは、最高学年となった彼らにとって、とても重要かつ重大なものであるらしい。まず「今年はどうする？やる？」の投げかけから始まるこの行事だが、「やらない選択肢などあり得ない」という反応が返ってくる。そして実行委員の立候補に挙がる手の多いこと。

立候補者による決意表明が自然発生的に行われていく。「最後の学年なので、思い残すことがないよう、取り組みたい。」「みんなの意見を聞き取って、みんなのやりたいことを全部実現したい。」言葉にも熱が入る。いつの間にかこんな風に育ったのかと驚いた。一人ひとりの真剣な思いを言葉にする姿、その一言一言を真摯に受け止めて頭を悩ませるクラスメートの姿に静かな感動を覚えた。「みんなの真剣さが伝わって選べない。」「立候補者のみんなにやってほしい。」「でも8人は多すぎる。まとまらなくなっちゃうよ。」「タイプは様々だけど立候補者の全員に熱を感じるよね。」「だめだ。もう1回ひとりずつの思いを聞かせてもらおう。」そうして2度目の演説が行われた末、実行委員長、副実行委員長に加え、総合演出という役も決まり、いよいよ2025年度の学園祭が動き出した。

1年生の時から、大きなお兄さん、お姉さんに迎えられ、楽しませてもらってきた学園祭が、いつしかもてなす立場へととなり、今年度は全体を引っ張るまでになった9年生。それまでに受け取ってきたものが、本当にあたたかく、滋養に満ちていたからこそこの姿なのだろうと思うと、その流れを作ってきたすべての人々への感謝が溢れだす。そして、この流れが今はまだあどけない低学年の子たちや、わんぱく盛りの後輩たちにも受け継がれていくのだろうな、と思うと頬が緩む。

学園祭はあくまでも子どもたちが主役。教員たちはサポートに徹する。今年度のテーマは話し合いにより満場一致で『宇宙』に決まった。思えば、学年の小さいころから星の話や月の話、星座にまつわる神話に目を輝かせる子どもたちだった。天文学のエポックを嬉々として受け、宇宙のリズムと人間の呼吸のリズムに不思議な一致があることや、惑星と地球との関係においてその動きが美しい幾何学模様を描くことに感嘆

の声を上げていた彼らの姿を思い出すと、それ以外にないほどびったりではないかと思えた。そして、グループごとのリーダー、副リーダーも決まり、計画的に準備を進めていくこととなる。例年通り、縁日、段ボール迷路、カフェに分かれ、新しいメンバーとともに活動していく。限られた期間の中でやる内容を決め、必要な作業と、かかる時間、かかる予算を明らかにしていく。また、ワークショップや希望者だけで行われる個人発表や劇、音楽演奏の打ち合わせも同時に進めるので、時間の調整は簡単ではない。7、8年生を気遣いながら、リードして作業を進める9年生に感心しつつも、時にハラハラしながら見守る。今年初めて一緒につくり上げる側になる7年生は、戸惑いつつも先輩たちの指示に従って、一生懸命動く。だんだんと表情も和らぎ、たくさんの笑い声が聞こえてくるようになった。2年目となる8年生は大層頼もしく、打てば響くように体が動く。彼らのこの1年間の成長にあらためて驚かされる。

毎日、17時になると激励を送って7年生に帰宅を促し、18時ぎりぎりまで8年生と共に手を動かして作業を進める9年生。時々、いやかなり頻繁に高等部に進んだ卒業生たちが差し入れ片手に校舎に立ち寄り、たわいもない会話をしながら手伝いをしてきて場を活気づける。そんな時は9年生も後輩の顔に戻って微笑ましい。この喜びが連鎖を生んでいるのだろうな、と教員たちも目を細めてその様子を見守る。



保護者の方たちからの差し入れも、子どもたちの頬っぺたを緩ませ心や体に沁みて、てきめん元気復活させる。面と向かっては素直になれない年齢でも、小さい子どものような表情で歓声を上げる様子がかわいい。

そんな毎日が繰り返され、いよいよ迎えた当日。朝の全体集会では緊張感と共に、高揚感で溢れる。生徒たちの生徒たちによる、みんなのための学園祭のスタートだ。

縁日、段ボール迷路、カフェ、どこも『宇宙』のテーマに沿った、アトラクションやメニューが盛りだくさん。随所に細かいこだわりが見え、驚きや感心が止まらない。訪れる子どもたちや大人たちにも笑顔が広がり、たちまち賑やかな会場となる。戸惑う人がいないか目を配り、スムーズな流れをつくるために自分から声をかけていく子どもたちが急におとに見えてくる。複雑なシフト組みを確認しながら、それぞれの持ち場で対応する彼らのなんと優しく親切、丁寧なこと。このまま世間に出しても恥ずかしくないと思うほどだ。お客さんに楽しんでもらうことに喜びを覚え、そのために自然と声を出し、手足を動かす子どもたち。その姿は美しく、頼もしく、誇らしい気持ちになった。私もすべてのアトラクションをまわり、カフェでの時間を堪能し、個人発表の琴と篠笛に感心し、七夕の劇やショーを楽しみ、音楽の演奏に泣き、胸いっぱい2日間を駆け抜けた。



2日目の最後の枠は卒業生のための特別な時間だ。たくさん先輩の来校に胸を躍らせる7～9年生。先生とも保護者とも、友だちとも異なる特別な存在なんだな、ということが伝わってくる。双方にとってこの伝統は大きな喜びだ。戯れて、楽しんで、一緒に歌い、最後には総出でお片付け。そしてお祭りが幕を閉じた。彼らの清々しい笑顔を見ると、思い残すことなくやり切ったのだなと思わされた。終了後のアンケートには、「優しく声掛けしてくれて、嬉しかった。」「手作りの景品がとても嬉しく感動した。」「段ボール迷路の工夫が面白かった。」「カフェのクオリティーにびっくりした。」「隅々まで工夫されていて飽きることがなかった。」「気遣いが素晴らしかった。」「という言葉が並んでいた。さらに「個人発表に感心した。」「テーマが一貫していて素晴らしかった。」「音楽に感動した。」というようなお褒めの言葉のオンパレードで面はゆくも何だか鼻が高かった。「先生、コピーを〇部お願いします。」「先生、買い出しに行きたいので〇円ください。」と忙しく立ち回る生徒たちに、胸の内で「子どもが主役だからね。」と言いながら、「はい、はい」とサポートしてきた教員たちにとっても充実した時間だったように感じる。

シュタイナー教育では9年生は高等部の1年目。高等部のある学校では一番の末っ子になる学年だが、この学校は高等部がないため9年生は最高学年のリーダーとして立ち居振る舞うこととなる。彼らの姿を見ていると、それがこの学校の大きなメリットとさえ思える。戸惑いながらも、一生懸命向き合い、形にし、たくさんの笑顔を届けたこの2日間は、多くの売上金の何倍もの価値ある体験となったことだろう。

宇宙のイメージで内装を施された校舎の中、生徒たちの輝く表情や訪れた方々の幸せそうな様子を見て、昨年、花巻市の宮沢賢治記念館で買い求めたポストカードの文面を思い出す。

『世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない…』

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである』

彼らにとっての大イベント。そのテーマを『宇宙』とした彼らに送りたいメッセージでもある。





今年の学園祭では Tanabata Wish for Tohoku という曲を、合奏チームとして集った有志の7～9年生の生徒たちが演奏することとなりました。この曲は学園の元音楽教員の原口理恵先生のご友人であるジョン・ビリングさんが作曲した曲です。以前は大きなライアーを抱えて学園の子どもたちに演奏をしてくださっていたジョンさんが、手紙という形で曲が誕生した経緯を子どもたちに伝えてくださいました。それを合奏リーダーの生徒が、何日もかけて辞書をひいて調べて訳したものを、学園祭当日みなさんに聞いていただきました。

後日、メンバー全員がお礼状を書きました。曲にちなんで短冊に描かれたメッセージには美しい笹の絵や夜空の星、織姫と彦星、緻密に描かれた楽譜、平和への思いなど子どもたちの心からのお礼の気持ちが詰まっていました。美しい曲に感動した気持ち、東日本大震災のときに人々を勇気づけてくださったお礼、そしていつか再び学園で演奏していただきたいという気持ちなどが書かれていました。楽譜とともに海を渡って届けられた手紙をジョンさんがにこにこしながら読んでくださると思います。



今年も学園祭での合奏チームが結成されました。年度が変わる前から合奏が大好きなメンバーが集まりました。9年生になるメンバーで曲を探し始めました。学園祭は生徒たちが主導で作られるものなので、わたしはほぼ彼らに任せる形で見守っていました。いくつか候補の曲が挙げられ、オイリュトミー室で、わたしがその曲をピアノで弾き、それを聴いて曲を選びました。Tanabata Wish for Tohoku との出会いはそのようなものでした。旋律の美しさ、その曲の持つ世界観にみんなが惹き込まれたのを鮮明に覚えています。

Tanabata Wish for Tohoku は、東日本大震災後に、度々日本を訪れていたジョン・ビリングさんが、復興の思いを込めて書かれた曲です。今回の合奏メンバーの7～9年生は、東日本大震災の直前に生まれた子、まだお腹の中にいた子たちで主に構成されています。彼らの記憶には無いかもしれませんが、あの震災の後の不安に満ちた時に生を受けた子たちです。その彼らがこの曲を演奏するというのは、特別な意味があるということが、言葉ではなく、肌感のようなもので感じられました。

ジョンさんがライアーのために作曲したものを、ヴァイオリン、チェロ、フルートでどのように演奏できるのか。リーダーになった9年生の生徒は、毎日時間をかけて、編曲作業に取り組みました。フルートの旋律から始まり、チェロの低音が長く響き、ヴァイオリンのピッチカートへと移っていきました。途中、シャープが6つもつく調へと転調。はじめて合わせた時は、合わなさすぎてびっくりするメンバー。こんなに難しい曲、できるのだろうか…と不安がよぎった子も。それでも、毎朝、毎昼、時には放課後も練習を重ね、どんどん形になっていきました。誰も投げ出さず、練習できたのは、彼らの力と、ジョンさんの曲の力だと思います。混沌と冒頭から、少しずつ動き出していく音楽。途中、全員でユニゾンで奏でる部分は、時が止まったようになり、その後、転調し、困難を乗り越えて(調号が多い困難も乗り越えて)、最後には、希望の光を見出す…

彼らの演奏から、とても強いエネルギーを感じました。指揮をしながら、大きな渦のようなものに包まれている感覚になりました。

ジョンさんにこの演奏を聴いていただけなかったのはとても残念でしたが、みんなで寄せ書きをしようという提案し、それぞれが思いを書きました。英語の渡辺先生からのメッセージの通りです。

ジョンさんと見えないもので繋がっているような気持ちで、生徒たちの手紙が、ジョンさんの手元に届くのを心待ちにしています。

## 3年生のくらしとしごとの活動より

3年生担任 太田 初

3年生になって背も伸びてきた子どもたち。霧が丘校舎の2階フロアには下に二学年もいて、自分たちがだんだんお兄さん・お姉さんになってきているのを感じていることでしょう。これまでは私が言うことに何の疑いもなくついてきた彼らも、最近は、「え〜」とか「もっとこうの方がいいんじゃない。」などいろいろ言うようになりました。今までぼんやりしていた世界が、だんだんはっきりと見えるようになってきたのが日々の小さな言動から見てとれます。体はますます活発さを増して、走る姿にも力強さが出てきました。(これは余談ですが、校庭で1から5年生が遊ぶ姿を見ていると、それぞれの学年の成長段階が感じられます。大人にとって五年間はあっという間なのに、子どもたちの一年の変化は本当に大きく、一日一日成長しているんだなぁと驚かされます。)

このような変化の入り口に立った3年生の時期に、「くらしとしごと」という授業を1年通して行います。土に触れ、体を動かして、しっかりと自分の足を大地につける学びです。具体的には、畑仕事や米作り、家づくりなど、自分たちのくらしを成り立たせている衣食住について実際に体験していきます。1学期は、ゴールデンウィークが明けたあたりからさまざまな活動に取り組みました。

まず、食べ物を栽培するまえに採集してみよう、ということで「よもぎだんご作り」をしました。どこの道端にも生えているよもぎですが、よく見るといろいろな葉の形があります。私も初めての経験で、授業の前に道端に目を凝らして歩いていたので、しばらくよもぎが光って見えて、いつもの道が楽しくなったほどです。5月初旬に子どもたちと、近所の空き地に出かけました。最初のよもぎを摘むと、「いい香り!」「これがよもぎだね!」と口々に言い合って、「新芽をとろう」と、それぞれに空き地の草をかき分けて摘んでいきました。袋いっぱい摘んだよもぎを教室に持ち帰り、選別をして洗い、茹でました。草だったよもぎが鍋の中でだんだんと食べ物になっていく様子を、子どもたちはわくわくして見守っていました。茹でたよもぎを刻んですりつぶし、白玉粉と混ぜてお団子に丸めて沸いたお湯に入ると、お団子は鮮やかな緑色に変わり、子どもたちの歓声が。お砂糖ときな粉をかけて食べました。「おいしいねえ。」「初めて食べたけど、おいしい!」と大満足だったようです。その後しばらくは体育で外に出かけると、誰かの「あ、よもぎ」という声を聞きました。

よもぎだんご作りの翌日、子どもの国の牧場へ、家畜と人がどのように関わってくらしているか学びに出かけました。子どもたちにとって初めての校外学習です。まずは牧場の手前にあるミルクプラントで、バター作りを体験しました。机には牛乳が並んでいて、皆いつも食べているバターがこの牛



乳からどうやってできるのか、興味津々です。係の方からの「10分間振りましょう!」という掛け声で、ペットボトルに移した牛乳を力一杯振りました。気がつくやうに、ペットボトルの中にふわふわと雲のようなものが浮いています。振るだけでバターができたことに、子どもたちは驚き、大喜びでした。できたバターは真っ白でさっぱりとした味で美味しかったです。その日お家で早速バター作りをした子もいたそうです。その次は牛舎へ。牧場の方が大きな牛たちを前に酪農のお話をしてくださいました。のんびりと座っている牛は、穏やかに大きな目でこちらをみていて、自然と子どもたちの心も静まります。牛乳を出すために牛は子どもを産まなくてはならないというお話も聞き、当たり前のことなのですが、改めて考えると普段何気なく飲む牛乳が特別に感じられました。乳搾りをした時には皆緊張した面持ちで牛に近づいていきました。でも牛のお乳に触れた途端、その温かさどフワツとした柔らかさに「うわあ、」と思わず声を漏らす子もいました。堆肥を作る過程も見学させていただきました。また生まれて1週間ばかりの子牛がいて、その大きさや立って餌を食べる姿に、子どもたちは「人間の赤ちゃんとは全然違うね。」と驚いていました。子どもたちは動物が大好きです。牧場の牛・子牛・羊・子羊に餌をやりながら動物たちを近くからよく見ることができました。あまりに子どもたちが動物たちから離れないので、お弁当の時間が短くなってしまいましたが、急いで食べて、最後に羊の毛刈りを見学しました。牧場のお兄さんが羊を脚の間に挟み、ある姿勢を取らせると急に羊が大人しくなってしまう、そのマジックのような手際に子どもたちはじっと見入っていました。いつも手仕事で使う羊毛はここからくるんだ、とよくわかったことでしょう。毛の刈り方や、羊毛がどのように生えるか、羊毛についての説明もたくさんしてくださり、お話の一つひとつが心に残ったようでした。その後堆肥や羊毛をいただき、学びや驚きのたくさん詰まった一日を終えました。



こどもの国でいただいた堆肥は、校庭にある3年生の畑にすき込み、野菜を植えました。小松菜はすくすくと育って、たくさん収穫できました。私はくらしとしごとの授業を通して、このクラスの素晴らしいところを新たに発見しました。食べることが大好きで、食欲が旺盛なところです。小松菜を間引きすると、お弁当の時間に「間引き菜♪間引き菜♪」と楽しみにして食べていました。最後は小松菜をお浸しにしました。たくさん取れたので、全部食べられるかな？と思いましたが、要らぬ心配で、皆でペロリと平らげてしまいました。

いただけてきた羊毛は翌日、皆でたらいで洗い、脂や汚れを落としました。石鹼水の中で振るとみるみる白くなっていく様子が気持ちよかったです。子どもたちは羊毛の中に入り込んだ藁や草の実や羊のまつ毛を取り除きながら、ここはどここの部分の毛だね、と予想し合っていました。山のような羊毛を教室に広げ、それから何日もかけて乾かし、少しずつほぐしていきました。教室はしばらく羊の香りに包まれ、羊小屋の中で学んでいるような気分でした。頑張っただけの羊毛は、これからフェルトにして、物差し入れを作る予定です。

5月の下旬には、学校のすぐそばにある昭和医科大学の自然教育園で、梅の実の収穫体験をさせていただきました。このご縁は、今年の冬、職員の方が学園に自然教育園の梅まつりのチラシを持ってきてくださったことがきっかけでした。学園から歩いて3分ほどのこんなに近いところに、整備された美しい梅園があったことに驚き、2年生の最後にクラスで



梅をみる遠足に出かけました。その時に、5月に梅の実を収穫しに来ませんか、とお誘いいただいたのです。願ってもないことで、楽しく体験させていただきました。梅園は花が咲いていた2月とは全く違う姿でした。5月の梅の木は青々と葉が茂り、生命力に溢れ、枝は実の重みでしなっていました。梅園にはさまざまな種類の梅が植えてあり、木によって実の大きさや色づきが違うことも、もぎながら気がつきました。子どもたちは背を伸ばし、次々に実をもいで、何度も手に持った袋をいっぱいにしていました。最後にはたくさんの梅のお土産をいただき、ありがたく帰ってきました。梅園は子どもたちのお気に入りの場所です。去り際には「また梅の花が咲く頃に来たいな」と言っていました。梅は保護者の方の協力も仰いで、シロップと梅干しに漬けました。



同じ週に、新治の森の片隅にお借りしている田んぼに田植えに出かけました。稲の苗から何から、新治里山「わ」を広げる会の遠田さんにお世話になっています。田んぼに到着すると、草を取るところから始めました。子どもたちは長靴下を2枚ばきにした足を恐る恐る田んぼに入ると「うわー！」とまずは歓声が。転びそうになるのも嬉しくて、きゃあきゃあ大騒ぎでした。田んぼの中では脚の裏に感じる泥の柔らかさがなんとも気持ちよく、感触を楽しみました。田植えでは、目印のついた紐を張り、その目印のところに苗を5本取りで植えていきました。一步下がるとにひと植え。だんだん慣れてリズムができてくると、声を掛け合って最後までいい調子で植えることができました。なかなか時間が取れずに、稲の成長を確かめに行けていないのですが、夏休み中に稲の花を見に行く予定です。

また、翌週には、毎年お世話になっている杉崎さんの畑で里芋とさつまいもの植え付けを体験させていただきました。皆ふかふかな土を触って、校庭の畑との違いを感じたことでしょうか。「手でこんなに深く掘れるよ」と感心していました。次に何うのは収穫の時という、とても都合の良い体験で申し訳ない気持ちでいっぱいですが、芋掘りも今から楽しみです。さて、1学期はこのように次から次へ、目まぐるしく活動してきました。どの活動でも、子どもたちのきらきらした目を見て、自分の体を使って学ぶことは本当に嬉しいことなんだと感じました。2学期はいよいよ家づくりが控えています。子どもたちにとって充実した学びになればいいと思います。



昼の長さや夜の長さが同じになる春分の日。この日を境に太陽の光が闇に勝ち、太陽の力がどんどん強くなっていきます。この頃は、地球が息を吐きだしている時期と言われますが、その様子は生き生きとした植物の成長の中に感じ取れると思います。花が咲き、芽吹いた若葉の緑は日に日に濃くなり、木々には青葉が生い茂っていきます。日の暖かさ、また、その長さに夏至に向かっていくのを感じながら過ごす、「薫風吹く爽やかな季節・・・」のはずでしたが、今年はこの時期とは思えぬ暑さが続き、早くから熱中症を心配する声があちこちから聞こえてきました。ヨハネ祭を心配する声も・・・例年、雨の心配ばかりしていたのに・・・。

昨年のヨハネ祭は、予定していた日に朝から雨が降り、止むを得ず延期。農業実習に出発した9年生の参加も叶わず、全校で祝うことはできませんでしたが、週明け、近隣の公園に集まった子どもたち、曇天の中でも、輝く笑顔があり、周囲から見守る大人たちの輪がありました。「楽しかった。でも、焚き火跳びたかったなあ。来年は跳びたいなあ」の声に、「そうね、来年はできるといいよね」と答えたのをよく覚えています。教員会でも、今年のヨハネ祭は、近隣の河原に集い、焚き火を炊いて、その周りで歌い、踊り、ささやかな食事をとり、最後には火を跳び越えて・・・と思っていましたので、河原に下見に出かけた時には、子どもたちが嬉しそうに河原を走る姿、焚き火を跳び越えた後の、ちょっとホッとしたような、自信をつけたような笑顔を想像していました。

でも、教員会では子どもの安全を第一に考え、河原に行くことを諦めて、朝に近隣の公園で集うことに決めました。今年も焚き火はできないのです。こういう時には、広い校庭があったら良かったのに、と心底思ってしまう。その一方で、どのような状況になっても、係の保護者の皆さんが子どもたちのため、できる限りのことをしようという姿勢をみせて下さることに感謝し、私たちは広い校舎も校庭もないけれど、子どもたちの成長を見守る温かい大人たちが沢山集っている、これこそが財産なのだから大丈夫、子どもたちは健やかに育っているのだから、と思うのです。

6月27日(金)は予想通りの暑い朝でしたが、公園に集まってくる子どもたちは笑顔でした。大きな輪ができると、いつものように皆で「太陽の輝き」を歌います。雨の心配もないので、ヴァイオリンの伴奏でダンスを踊ります。小さい子と大きい子がペアになっているので、優しく声をかける上級生の姿、大きな輪をスキップ(間に合わず走って)で一周する時には、ペアになっているお兄さん、お姉さんに再び会え、嬉しそうな顔を見せる小さい子どもたちの姿に、皆で集う喜びを感じるひと時でした。太陽に見立てた大きな輪を支えてくれるのは8年生、その輪を準備してくれたのは6年生。そこにお手玉のような太陽の子を投げ入れるのはいつものヨハネ祭と一緒に。1年生は初めてなので、9年生が手を引きサポートしてくれます。2年生以上の子どもたちは「今年は入るかな」と真剣な眼差しで輪を見つめているのがなんとも愛らしかったです。今年は太陽の子についている細いリボンを少し長く作り変えたものも多く、飛んでいく姿がきれいだったとの感想も聞こえてきました。例年通り、太陽の子を投げる8年生、9年生の力強い姿に拍手が起こり、下級生たちは憧れの眼差しで見上げていました。再び輪になり歌を歌い、ヨハネ祭は静かに閉じていきます。

この後、子どもたちのために校舎の中では、昼食の準備が始まりました。多くの方が手を挙げてくださって焼きあがったパンと、夏野菜のささやかな食事です。子どもの食べる量にあわせ、保護者の皆さんにはお弁当の量を調節いただいています。パンのいい香りと瑞々しい野菜が、おひさまの部屋に並べられた机いっぱい広がっています。クラスごとにお皿や籠に載せたものを配って行きました。霧が丘校舎では、教室のドアが開いて野菜とパンが見えると大きく目を開き、その後嬉しそうに笑顔を見せてくれました。十日市場校舎では7年生がそれぞれのクラスごとにお皿に盛りつけ、運んでくれました。どのクラスも喜びをもって食していたとのことでした。

太陽の日を受けて育った食物を、皆で感謝していただくことはとても大切だと感じています。祝祭とは、自然界(精神界)と人間が再び結びつき、その喜びを感じることです。ヨハネ祭は、夏から冬へと向かう道の始まりです。明るく輝かしい光の中に始まりますが、その道は暗い聖夜へと向かう道です。楽しい夏の祝祭ではありますが、ここから、大人は一人ひとり意識的に過ごしていかなくてはなりません。子どもたちにとっては、自然を謳歌し、感謝をもって季節のものを頂くこの体験を毎年繰り返すこと、それが心の糧となり、自分の足で歩いていく時の支えにもなっていくだろうと感じています。

1学期末の「学期祭」では1年生から9年生までの子どもたちが登場し、1年間学んできたことを教職員、保護者、他学年の子どもたちに見守られながら披露します。

学年が上がるごとに変化する体つき、動き方、そして発表内容から子どもたちの成長を喜びをもって受けとめていく貴重な機会となっています。



1年生 リズムの時間より



2年生 エポックより イソップ物語



3年生 音楽の授業より



4年生 オイリュトミー  
まど・みちお 「いいけしき」  
J.ハイドン 「メヌエット」



5年生 リズムの時間より



6年生 リズムの時間より



7年生 オイリュトミー  
F.シューベルト 「マーチ」  
谷川俊太郎  
「とりがいるからせかいがある」  
D.スカルラッティ  
「ソナタ ホ長調 L.23」



8年生 オイリュトミー  
島崎藤村『二つの聲 「朝』』  
A. モーツァルト 「7. Kleiner  
Trauermarsch in c -KV453a」



9年生 農業実習報告

横浜シュタイナー学園 ～ Newsletter 第 170 号～  
2025 年 7 月 29 日発行

編集：広報の会  
発行：NPO 法人横浜シュタイナー学園  
<https://yokohama-steiner.jp>  
〒226-0016 横浜市緑区霧が丘3丁目1-20  
TEL 045-922-3107  
※ 掲載内容の無断転載をお断りします